

5. 自然再生の目標（自然再生の目標を明確にする。）

(1) 目指すべき姿は『豊かな漁場・遊べるきれいな中海』です。

かつての中海は、ハゼ、カレイ、ウナギ、アカガイ、アサリなどの多種多様な魚介類が豊富で、アマモに代表される藻場も広がっており、漁師並びに市民はいつでも自由に採捕していました。

捕った魚貝類、海藻類はすぐさま、各家庭の食卓に並び自然からの贈り物に感謝し食していました。

いわば中海は、「自然の冷蔵庫」と呼べる豊かな汽水湖でした。

昭和 30 年前半までの汽水湖（中海）は綺麗で、多くの市民が魚釣りや水泳、貸しボートなどで遊ぶ風景がいたるところで見られました。

しかし現在はどうでしょう？ 湖底にはヘドロが厚く堆積し水質を悪くさせて、赤潮や青潮が毎年のように発生するとともに、漁獲量は激減しました。

また、沿岸地域は産業の発展に伴い、工業、商業、農業用地確保の為に中海より浚渫された土砂により造成され、あわせて護岸整備も急速に進み水辺は大きく変わり、昭和 30 年代前半のような水遊びが出来る場所は、ほとんど見あたらなくなりました。

このような中海にした原因は、産業活動を重視し、自然を軽視するとともに、湖岸等に目を向けて、こなかった私たち人間にあります。

中海では干拓事業に代表されるような様々な人為的開発と洗剤等を利用した生活が続けられた結果、開発と便利な生活の後には汚れた中海だけが残されました。

この間の変化を身をもって経験し自然改変の及ぼす結果の重大性に気付いた私たちは、これを深く反省し再びこの様な中海にしてはいけないとの想いで自然再生に取り組むとともに、以前のような恵み豊かな中海に再生し、子孫に確実に伝えることが私たちの使命（役目）であると痛感しています。

そのような考えのもと、私たち中海自然再生協議会は、人と湖のつながりを深く見つめ直し残された自然を大切にしながら持続可能な豊かな中海を取り戻すことを、自然再生の目標とします。（上記は奥田益算氏作成の文書を主に構成）

(2) 目指すべき姿（イメージ）

（広く一般に活動内容を知っていただくために、イメージ図案を公募とする。）

(3) 流域全体で達成したい大きな目標（推進の柱）

1). 住民一体となった中海を活かした地域づくり。

中海圏域に住む殆どの人が川と湖に関心を持ち、親水ゾーンを知っていてそれを楽しみ、いくらかの科学的知見を持って、地域の自然を愛護する心を行動に移す事がなければ、自然の保全再生を持続させる事は希めません。したがって、確かな親水ゾーンを再生したり、水質を改善して藻類・魚貝類・鳥類が豊かに育つ中海圏域づくりをすすめる全ての段階の節目毎に、中海圏域の全ての人が、それを知り、共に考え、共に参加できる機会を持てるような企画を立て実行しなければなりません。このような努力の積み重ねを通して、中海圏域の自然と、住民の心や生活とが活性的に循環する関係が醸成されます。それを文化的風土として根づかせるような、人と湖・河川との新しい繋がり再構築を図ります。

（中海圏域：中海と、そこに流入する 21 の河川の流域を囲む全域）

（美見）

2). 将来を担う子供達と住民の環境教育の推進。

地中海の自然を再生するに当たり、例えば「水辺の学校」等で、子供達をはじめ地域住民がいかに地中海に親しみを感じていただけるのが重要であります。その為には、湖岸の浅場・藻場を生かし、生態系の多様性を理解していただく必要があります。過って、地域の人たちが湖といかに関わってきたのかを理解すると共に、今後地中海の再生に伴い、どのように地中海と関わっていくべきか、示すと共に理解していただくことが重要であります。

地域の小中学校から、公民館活動へと、又地元大学・専門学校との連携が必要となってきます。人々の生活を豊かにするには、如何に地中海の環境再生が重要か、理解させていく為の環境教育を推し進めていきます。

(船越)

3). 水辺の保全再生とラムサール条約に基づく水鳥との共存

地中海はコハクチョウ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモなど水鳥にとって重要な越冬のための湖であり、2005年にはラムサール条約の登録湿地になった。これらの水鳥との共存は地域住民の誇りであり、今後も多くの水鳥が飛来できる環境を保全していく必要がある。また、ラムサール条約の登録から外れることになったが、湖岸帯、いわゆる水辺は多くの生物にとって重要な部分であり、水質浄化にも重要な役割を果たしている。地中海ではこれまでの多くの開発事業により水辺の人工化が激しく、限られた湖岸を除いて垂直湖岸となっているところが多い。飯梨川河口などの残された貴重な自然湖岸を大切に保全して行くと共に、垂直湖岸の部分を可能な限り再生し、生物の多様性を高めると共に親水性を向上させ、住民が近づけ遊べる水辺を再生する。

(相崎)

4). アマモ場の再生と赤貝（サルボウ）の復活。

湖岸埋め立てで失った浅場を再び求めると同時に、アマモ場再生の技術を確立して、そこに豊かな藻場の造成を図る。これによって稚仔魚の育成保護や水質浄化、底質改善など生物の生息に好ましい環境をよみがえさせる。また、水産資源の復活、とくにかって地中海を代表する漁獲量を誇った赤貝（サルボウガイ）の絶滅寸前の現状に至る経緯と環境要因との関係を明らかにして有効な資源復活の手立てを講ずる。

水質浄化や底質改善の目的で刈り取り、湖外に搬出した海藻や海草の利用法を産業活性化と結びつけて検討し、地中海自然再生の実現を経済的視点からも進める。

(中尾)

5). 水質浄化と底質改善による汽水域生態系保全。

地中海の水質悪化、特に貧酸素水塊形成のメカニズムを明らかにし、その解消を図る。貧酸素水塊の解消を進めることで底質改善も期待されるが、地中海の場

合は塩分躍層のほかに浚渫窪地の存在が水質悪化に強く関わっている。これの埋め戻しによる底質改善が貧酸素水塊解消と同時に水質改善にも有効である。したがって、埋め戻しの方法とそれがもたらす環境への影響について検討し、早急に結論を得る必要がある。

加えて、流入河川からの汚染物質の負荷量を抑える手立て、さらに直接的な水質改善の方法の確立と海水交流の促進から汽水域生態系保全のための具体的な対策を講ずる。

(中尾)